

歴史・遺跡と向き合う人生

山下 信一郎

昭和60年卒業（37回生）文化庁・文化財調査官

現在、私は文化庁文化財部で文化財調査官という仕事をしています。文化庁には、美術工芸品・建造物・記念物などといった文化財の種類毎に専門家が配置されており、そのなかで自分は、日本の歴史を理解する上で重要な遺跡を保護する部門に属しています。具体的に言えば、重要な遺跡を文化財保護法に基づき「史跡」（史跡のなかで特に重要なものは「特別史跡」）に指定して保存するとともに、全国で行われている史跡の整備事業に、専門的立場からアドバイスしていく仕事です。国指定の史跡は現在1700件ほどあり、例えば、佐賀県の吉野ヶ里遺跡、奈良県の平城宮跡、群馬県の旧富岡製糸場、都内では国分寺市の武蔵国分寺跡などがあります。昨年の熊本震災で大被害を受けた熊本城跡は、特別史跡に指定されています。

私は小学校低学年の頃から歴史や遺跡が大好きでした。古いことを知ることにとっても関心があり、コツコツ調べるのが楽しかったのです。中学生の時、体育館の建て替えに伴う発掘調査があり、体験発掘に参加したこともあります。こんな少年でしたから、昭和57年、新宿高に入学した頃には、将来は歴史研究者になって大学で教鞭を執るか、もしくは社会科の教師になりたいと思っていました。部活は、言うまでもなく地理歴史研究部。部活顧問の先生引率のもと、夏の巡検旅行として、福島や三重に行き、風土や歴史を調べ、地形図をもとにジオラマを作成して、朝陽祭で発表したことは、とても楽しい思い出です。

昭和60年3月に新宿高を卒業、東京大学教養学部文科Ⅲ類に入学、その後文学部の専門課程に進んで日本古代史で卒業論文を書きました。文系は大学院に進学してもなかなか研究職のポ

ストがなく、大卒で就職するかどうかが、進路を迷いましたが、初志貫徹しようと大学院に進み、研究を続ける道を選びました。予想通り、なかなか就職口がありませんでしたが、博士課程年限最後の年、奈良国立文化財研究所（奈文研）に採用され、研究員としての勤務がはじまりました。

奈文研は、平城宮跡をはじめとする奈良の文化財を調査研究するとともに、国内の遺跡研究の中心的機能を有する研究機関です。もともとは文化庁の付置機関でしたが、現在は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所となっています。発掘調査部に配置された私は、平城宮跡・藤原宮跡・寺院跡の発掘調査や、発掘調査で出土した木簡（木に墨で文字を書いたもの）の解読作業に従事しました。紙が貴重であった奈良時代、全国から都に納めた税の荷札や、役所内の文書として木簡が多用され、不要となると溝やゴミ穴に廃棄されました。それらが1300年後の今日、発掘調査によって見つかるのです。誰も見たことのない生の史料を扱う訳ですから、本当に研究者冥利に尽きる思いでした。

平成14年、東京の文化庁に転勤となり、現在は冒頭に述べた遺跡保護の仕事をしています。業務の範囲が原始から近代まで、最近では昭和時代の遺跡も扱います。出張や会議が多く、多忙な日々が続いていますが、全国に残る様々な遺跡を踏査することができ、地元の文化財担当者の方と知り合うことができるのは、大きな喜びです。新宿高を卒業して31年、就職して20年余が経過しましたが、歴史・遺跡と向き合う人生を続けています。

（朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。）